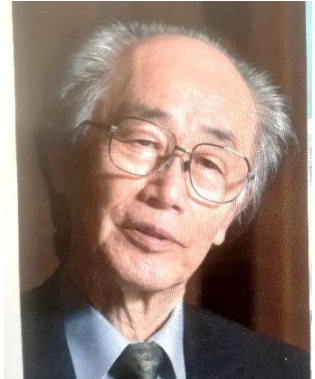


柔和で反骨のジャーナリスト 内橋克人さん！

竹の台 島田 徹

10月4日、神戸新聞社主催の故内橋克人さん（2021年没、89歳 経済評論家）を偲ぶ講演会に参加しました。国谷裕子さんの講演と、2部では4人の方のシンポジウムで、改めて内橋さんの柔和で気骨ある人柄に勇気をもらいました。

国谷さんが「クローズアップ現代」（NHK 1993～2016）のキャスターで、社会問題を忖度なく、鋭い切り口で追及する姿に、私たちは溜飲を下げていたと思います。しかし、政府の圧力で降板させられたことは、メディアが権力へ忖度したあからさまな事件として、私はいまだに憤りを禁じえません。



国谷さんからは、「内橋さんは、『クロ現』に度々出演し、当時の規制緩和と効率化という日本の針路に対し、社会的弱者の目線で、忖度なく批判したジャーナリストで情熱家だった！」と紹介されましたが、視聴者も同様に感じたと思います。

シンポジウムでは「内橋さんは13歳の時、神戸空襲で身内を亡くした体験が、社会的弱者の立場に立ち、戦争を許さないという人生哲学の礎となった」「平和についても『鎌倉・九条の会』を立ち上げ、井上ひさしさんたちと行動していた」「F（食料）E（エネルギー）C（介護）自給圏構想」などが紹介されました。

私は以前から、内橋さんが神戸新聞の論説委員として、政府やメディアに忖度せず、社会問題を分析し、その解決策まで提案している姿に溜飲を下げていました。また、平和に関しては、「鎌倉・九条の会」を立ち上げ、「マスコミ九条の会」の呼びかけ人の一人でもあり、その反骨精神の人柄に共感を覚えていました。

こうした内橋さんの人生哲学の出発点が、「戦争体験」だったことと、昭和32年の神戸新聞入社時の3つの心得、「①現場に行って自分で確かめろ②上を見て仕事をするな③攻める側ではなく、攻められる側に身を置け」を忠実に実践した人だったと分かりました。この3つの心得は私の「理屈ではなく、現実重視」という考えと共振していると思っています。

講演会の締めくくりに、内橋さんの「未来を生きる日本人へのメッセージ」（2011年、NHK）が流されました。『戦前、戦中、戦後を通じて、戦後はそれまでと違うと思い込んでいるが、‘お上や企業’＝頂点に同調し、異議を申し上げる勇気がなくて言わない、この「頂点同調主義」は変わっていない。また、熱狂的に同質化を求める＝「同質化主義」は戦後も続いている。政府やメディアの賛成論に同調するのではなく、自分の頭で考える日本人になってほしい』

内橋さんのこのメッセージは、SNS による国民の情報操作の危険性や、先日の日米首脳会談で、日米軍事同盟強化で、「戦争する国づくり」を急ピッチで進めることを約束した今の高市内閣に対する警鐘であり、また、これに抗する 9 条の会と私たちへの叱咤激励と感じています。

(9HP202511)